
〈論文〉

スコットランド王国の宗教改革前夜(2)

—— スコットランドの近代への途 ——

Era before the Reformation in the mid-16th century
of Scotland (2)

—— On the Way to Modern Society ——

久保田 義 弘

要旨と目次

本稿では、16世紀中期のスコットランドの宗教改革前夜、国際情勢の中でイングランド王国とフランス王国に翻弄されながらも、スコットランド王国が自国のアイデンティティを模索し、その統治に係わった国王ジェイムズ5世の対応を調べる。特に、スコットランドの自律あるいは自立に政治生命を賭けた国王ジェイムズ5世の時代において、イングランド王国の支配あるいは征服を回避しながらも、しかし、徐々にその一体化政策に飲み込まれていくスコットランドを歴史的出来事を通じて調べる。ヘンリー8世やエドワード4世による手荒な求婚戦争、例えばピンキー・クロッホの戦いによって、イングランドに譲歩を迫られ、スコットランドは、エディンバラ条約によってフランスとの古い同盟を破棄した。

本稿では、ジェイムズ5世の治世と彼の外交政策や宗教政策を概観し、イングランド王ヘンリー8世による手荒な求婚とその後のピンキー・クロッホの戦いを概観し、イングランドの一体化政策に対するスコットランドの対応を明らかにする。

(キーワード：永久平和条約、古い同盟、一体化政策、手荒な求婚戦争、ピンキー・クロッホの戦い、エディンバラ条約、爵位貴族、爵位のない土地貴族、会衆指導層、第一信仰盟約)

はじめに

本稿では、16世紀中期における宗教改革前夜のスコットランド王国の近代化に焦点を当て、イングランドの一体化政策にスコットランドがどのように対応したのかをジェイムズ5世の外交政策と宗教政策を通じて概観する。

第1節 ジェイムズ5世の外交政策と宗教政策と彼の死

1.1 ジェイムズ5世の親政：外交政策と宗教政策

1527年から1528年に亘り、ジェイムズ5世は、デイヴィット・ビートンと共に国政に携わった。マーガレット・テューダと6代アンガス伯が1528年3月に離婚すると、16歳になったジェイムズ5世は、エディンバラ城を抜け出し、6代アンガス伯の手を逃れて、王母マーガレット・テューダと初代アラン伯の住むスターリング城に戻り、落ち着いた。ジェイムズ5世は、親政に乗り出し、王権の維持・確立に乗り出した。彼の親政手腕を内政面で見てみよう。彼は、スターリング城で直ちに親政に乗り出し、議会を招集し、6代アンガス伯一族の処刑と伯領の没収を議決した。1529年にジェイムズ5世はタンタロン城（Tantallon Castle）を包囲し、ダグラス家のメンバーとその連合者は議会によって土地とその資格を喪失した。6代アンガス伯は、1529年スコットランドを去り、ジェイムズ5世の治世の間、スコットランドには戻らなかった。彼は、イングランドに逃れ、ヘンリー8世と連合の約束¹をし、権力への回復が約束された。また、アンガスの妹 Janet (Lady Clamis) は、兄アンガスと連絡しているという罪で諮問されたが、彼女は現れなかった。彼女の財産は没収され、彼女は、1537年にジェイムズ王の命を狙う陰謀で捕らえられ、焚死した。

1543年1月に6代アンガス伯とジョージ・ダグラス（George Douglas of Pittendreich）（1552年没）はイングランドから戻ってきた。帰国後、6代アンガス伯は、5代マックスウエル卿の女子マーガレット・マックスウエル（Margaret Maxwell）（生没不詳）と結婚した。ジェイムズ5世は、イングランドと休戦条約を結び、南の国境の安泰を確保し、西部あるいは北部の地方氏族との関係強化の政策を推進した。1529年11月にベリクで6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスとその仲間の返還についてイングランドとの間で交渉が行われた。イングランド側は、その交換条件としてジェイムズ5世とヘンリーの子メアリーとの結婚を持ち出したと思われる。5年間の休戦が交わされ、6代アンガス伯のイングランド逃亡は認められた。このときスコットランド側の交渉役は、アダム・オターバン（Adam Otterburn）（1548年没）であった。また、彼は1534年5月に国境平和条約（永久平和条約）でもスコットランド王国を代表して調印している。彼は、父王ジェイムズ4世と同様に全国を駆けめぐり、身分の低いもの貧しいものに気を配り、国民からの人気を博した。その人気を利用して彼は、父王と同様に、全国視察では地方のおぼこ娘に次々と手を出したが、彼の女性好みは田舎の貧しい娘には限らなかった。アースキン家（Erskin House）のマーガレット（Margaret Erskine）

¹ 6代アンガス伯とイングランドとによる陰謀は、彼の兄弟の賢い策略家であったジョージ・ダグラス（George Douglas of Pittendreich, Master of Angus）（1552年没）の導きで進められた。

(ロッホリーヴンのロバート・ダグラスの妻), エルフィンスタン家 (Elphinstone House), ビートン家 (Beaton House) の娘たちもジェームズ5世の後宮に加えられた。全国を駆けめぐる点で父王ジェームズ4世の気質を継いでいたが, 前王の寛容さは継いではいなかった。彼は他の中世の国王と同じように強権を発動した。たとえば, 国王に反乱を起こしていたアームストロング一族 (Clan Armstrong) とのカーレンリグ (Carlenrig) での会合のために, 安全な交通証書を発行したが, 彼にはイングランド国境界の部族を鎮める策略があった。ジェームズ5世は, ジョン・アームストラング (John Armstrong) (生没不詳) とその連隊を謀反の故に捕らえ, 1530年にジョンを首吊りに処した。また4代アーガイル伯コリン・キャンベル (Colin Campbell, 4th Earl of Argyll) (1507年生?-1558年没) を嫌い, 彼の死後, 同家世襲のシェリフの職位を取り上げた。

その外交政策と宗教政策では, カトリックを選び, フランスとの同盟を強化した。当時の国際社会では結婚も大事な外交政策の一端であった。彼は, 1537年にフランソワ1世の娘マドレーヌ・ドゥ・ヴァロア (Marie de Valois, Madeleine de Valois) (1520年生-1537年没) と結婚した²。彼が多くの妃候補者の中からフランソワ1世の娘を選んだのは, 第1に, フランス王国との「古い同盟」の維持ならびに1517年のルーアン協定の実行にあった, 第2に, 宗教問題であった。ジェームズ5世は, カトリック国であったフランスを選んだと推測される。大陸では, ルターに端を発する新しい信仰が広まりつつあった。スコットランドは, 新教によって, 大陸ほど強い影響を受けてはいなかったが, ヘンリー8世によるイングランド発の新教(イングランド国教)の影響を受ける恐れがあった。ヘンリー8世は, 兄アーサーの未亡人であったキャサリン・オブ・アラゴン (Catherine of Aragon)³ (1485年生-1536年

² 2人は1537年にパリのノートルダム聖堂で挙式した。しかし, 半年後にマドレーヌはホーリールードハウスで病没した。1538年にジェームズ5世は, フランソワ1世の重臣であったギーズ公クロード・ドゥ・ロレーヌ (Claude de Lorraine, duc de Guise) とアンカネット・ドゥ・ブルボン (Antoinette de Bourbon) (1493年生-1583年没) の娘のマリー・ドゥ・ロレーヌ (Marie de Lorraine) (1515年生-1560年没) と再婚した。

³ キャサリンは, アラゴン王フェルディナント2世 (Ferdinand II of Aragon) (1452年生-1516年没) (在位1479年-1516年) とカスティール女王イサベラ1世 (Queen Isabella I of Castile) (1451年生-1504年没) (在位1474年-1504年) の子として生まれた。彼女は, 彼女の母方から, 彼女の曾祖母 (Catherine of Lancaster) はジョン・ゴント (John Gaunt) (1340年生-1399年没) の娘であった。彼女は, 低い背丈で, 長い金褐色の髪, 青い大きな目, 丸い顔, 色白であった。彼女は, ラテン語, スペイン語, 英語, フランドル語, フランス語, ギリシャ語の読み書き会話ができ, 聖職者の書記官であった。彼女は, 1501年11月にウェールズ王子のアーサー・ヘンリー (Arthur Henry, Princes of Wales) (在位1501年-1502年) (1486年生-1502年没) と聖ポール大聖堂で結婚した。彼らはウェールズの国境の Ludlow の Lodge 城に居住した。2人は直ぐに病になり, 結婚後5か月でアーサーは死亡した (1502年4月)。ヘンリー7世はキャサリンとアーサーの弟のヨーク公ヘンリー (後のヘンリー8世) との再婚を望んだ。その時, カスティール王国はキャサリンの妹 Joanna に継承されていた。キャサリンはヨーク公との再婚に同意したが, ヨーク

没)と婚約したが、当時、兄嫁との結婚は近親相姦と考えられていたので、教皇ユリウス2世に願い出て、1504年に特免状の発布を受け、1505年に正式に婚約し、1509年にヘンリー8世はキャサリン・オブ・アラゴンと結婚した。ヘンリーが18歳でキャサリンが23歳であった。2人の間に6人の子女が産まれるが、後にメアリー1世となる女子だけが生長した。しかし、世継ぎの男子は育たなかった。イングランド王ヘンリー8世は、最初の王妃キャサリン・オブ・アラゴン(Catherine of Aragon)との間の娘メアリーをジェームズ4世の結婚相手として押しつけてきた。神聖ローマ皇帝カール5世は、妹のカタリナ・デ・アウストリア(Catalina de Austria)(1507年生-1578年没)(後にポルトガル王ジョアン3世(João III)(在位1521年-1557年)の王妃)を押しつけ、教皇クレメンス7世は、姪のカテリーナ・デ・メティチ(Caterina di Lorenzo de' Medici)(1519年生-1589年没)(後にフランス王アンリ2世妃)を持ちかけた。

1526年にヘンリー8世はキャサリンの侍女であったアン・ブーリン(Anne Boleyn)⁴(1501/1507年生-1536年没)に夢中になり、聖書の記述に基づき、男児が育たないのは兄嫁と結婚したためと判断し、キャサリンとの結婚の無効をローマ教皇に訴えた。しかし、彼の言い分はローマ教皇に認められず、その結婚は教皇の特免状を介した結婚であった。同時に、ヘンリー8世はアン・ブーリンとの再婚を目論むが、それはローマ教皇に認められなかった。宮廷内にもその再婚に反対する者がいた。その上、キャサリン・オブ・アラゴンは神聖ローマ帝国の皇帝カール5世の叔母であったので、カール5世は教皇クレメンス7世(Clemens VII)

公はキャサリンより5歳年下であった。このとき、ヨーク公は11歳であった。アーサーの死から7年が経過した1509年6月に23歳のキャサリンは18歳のヘンリー8世と再婚した。2人はウエストミンスター修道院でカンタベリー大司教によって聖油を塗られ冠を被せられた。2人の間には6人の子女が生まれたが、2人(1人が男児)は死産で、3人(その内2人は男児)が生後すぐに死亡した。後にメアリー1世(Mary I)(1516年生-1558年没)(在位1553年-1558年)となる女子のみが成長した。1518年がキャサリンの最後のお産であった。男児が育たなかったことにより、ヘンリー8世は世継ぎの男児を求めた。このころ女子が王位を就くという先例はなかった。1535年には、キャサリンはKimbolton(キンボルト)城に送還され、娘メアリーとの面会や手紙の遣り取りや会話を禁じられた。1536年1月にキャサリンはキンボルト城で死亡した。彼女は、ピータバラ大聖堂に、女王としてではなく、ウェールズ王子の未亡人として埋葬された。⁴彼女は、トマス・ブーリン(Thomas Boleyn)(1477年生?-1539年没)とエリザベス・ハワード(Elizabeth Howard)(1494年生-1558年没)の娘であった。彼女は、ネーデルランドとフランスで教育を受けた。彼女は、7年間、フランス王妃メアリー(ヘンリー7世の娘)の女官であった。彼女は、フランス宮廷でフランス語、フランス文化、ファッション、宗教を修めた。彼女は、黒髪の中ぐらいの身長で、首が長く、顔は浅黒く、黒く美しい目をしていて、彼女は、宗教的には新しい伝統の献身的なキリスト教徒であった。彼女がヘンリー8世の宗教改革に影響を与えたのであろうか。彼女は、教会改革には積極的で、聖書の自国語訳にも協力的であった。ローマ教皇の側に立っていたトマス・ウルジーの罷免にアンが関与したかどうかは不明である。彼女も男子の出産に至らなかったためにヘンリー8世から宮廷を追放された。彼女の場合には、姦通あるいは近親相姦を理由として追放された。1536年5月に彼女は逮捕され、ロンドン塔に監禁され、首を刎ねられた。

(在位 1523 年-1534 年) に圧力をかけその結婚を阻止しようとした。その交渉役に大法官トマス・ウルジー (Thomas Wolsey) (1471 年生-1530 年没) をヘンリー 8 世は当てたが、彼はその交渉に困難を極めた。ウルジーがアン・ブーリンをローマに逃亡させようとしたので、ヘンリー国王は彼を解雇した。ウルジーは 1530 年に病死した。最終的には、カンタベリー大司教のトマス・克蘭マー (Thomas Cranmer) (1489 年生-1556 年没) に指図して、キャサリンとの結婚の無効の裁定を出させ、キャサリン・アラゴンの侍女であったアン・ブーリンとの結婚を正当化した。ヘンリー王はキャサリンを宮廷から追い出し、彼女の部屋をアン・ブーリンに与えた。1533 年 5 月にカンタベリー大司教トマス・克蘭マーは Dunstable 修道院で開かれた臨時宮廷でキャサリンとヘンリー 8 世の結婚の無効性を宣言した。1533 年にヘンリー 8 世はキャサリン・オブ・アラゴンと離婚し、アン・ブーリンと再婚した。ヘンリー 8 世は、カンタベリー大司教トマス・克蘭マーに結婚の無効のお墨付きを出させ、新しい宗旨こそ出してはいなかったが、ルターと同様にローマに楯突いた。その無効性の宣言後直ぐにヘンリー 8 世とトマス・克蘭マーはローマ教皇によって破門された。ヘンリー 8 世がイングランド教会の長になった。イングランド教会はローマからの分離・独立することとなった。

ジェイムズ 5 世は、自身がカトリックを強く信仰していたことから、ヘンリー 8 世のローマとの断絶が新教に至ると判断し、フランス王国から王妃を迎えたと思われる。

1.1.1 ジェイムズ 5 世の宗教政策

中世後期末になると、修道院は靈的な伝達機関であることをやめて、資産団体になっていた。その資産の管理は俗人の管理に委され、時には修道院の土地からの収入を目当てに在俗の聖職者にその管理権が握られることもあった。この管理権を最も巧く利用したのがジェイムズ 5 世であった。彼は彼の庶子に聖職禄を与えるために、修道院や教会の資産を利用した。決して、ローマ・カトリックの教義や儀式に疑問を投げかけることはなかった。彼は、教会の経費で彼の庶子の生活に十分な収入をもたらした。ジェイムズ 5 世には 9 人の非嫡出子がいた。その男子の多くは聖職者になり、独身生活を誓った。3 代レノックス伯ジョン・ステュワートの娘(エリザベス・ステュワート)との間に生まれたアダム・ステュワート (Adam Stewart) (1575 年没) はパースの Charterhouse (カウトゥジオ修道会の修道院)⁵ の prior になった。

⁵ これはアルプスの La Grande Chartreuse に 11 世紀に開かれ、ヨーロッパでは最も厳格な修道会であった。1429 年に創建されたスコットランドでただ一つのカウトゥジオ教会であった。その修道院はジェイムズ 1 世 (James I) (在位 1406 年-1437 年) によって創建された。その修道会は、一人の Prior と 12 人の使徒(平信徒)で構成されるのを原則とした。実際には、初めの段階では 17 人の信徒がいた。宗教改革のころ (1559 年 5 月)、カウトゥジオ修道院もプロテスタントに襲われ破壊された。1 人の信徒が殺され、4 人が海外に

エリザベス・ベスヌー (Elizabeth Bethune) の娘との間に生まれたジャン・ステュワート (Jean Stewart) (1588 年没?) は 5 代アーチボルド・キャンベル (Archibald Campbell, 5th Earl of Argyll) (1532/1537 年生-1573 年) と結婚した。エリザベス・ショウ (Elizabeth Shaw) との間に生まれたジェイムズ・ステュワート (James Stewart) (1529 年生?-1559 年没) は、ケルソーおよびメルローズ修道院長 (Commendator)⁶ になった。ユーフィンヌー・エルフィンスタンとの間にはホーリールード宮殿の修道院長 (Abbot あるいは宗教改革後では Commendator)⁷ になった初代オークニ伯ロバート・ステュワート (Robert Stewart, 1st Earl of Orkney) (1533 年没) が生まれた。エリザベス・カーミハエル (Elizabeth Carmicheal) との間に初代ダーンリー卿になり, Coldingham 修道院次長 (Prior)⁸ になったジョン・ステュワート (John

逃避し, 6 人が残った。その中の 2 人 (prior のアダム・フォーマンと他の信徒) は 1567 年に海外のカウトゥジオ修道院に逃げた。Prior が空白の期間 Adam Stewart (ジェイムズ 5 世の庶子) が Prior になった。1569 年にジェイムズ 6 世は修道院をパース市民に寄附したが, 王国が使用し, 1602 年まで参事会が管理した。

⁶ ジェイムズ・ステュワートのケルソー修道院長 (Commendator) の期間は 1534 年から 1537 年, メルローズ修道院長 (Commendator) の期間は 1554 年から 1557 年であった。

⁷ その在任期間は 1539 年から 1568 年である。この修道院は 1128 年にデイヴィット 1 世 (David I) (在位 1124 年-1153 年) によって創建された。修道院はマートン修道院 (Merton Priory) からのアウグスチヌス聖堂参事会修道士の会議に利用された。1177 年にはローマ教皇特使 Vivian が Holyrood 修道院で会議を開き, 1189 年には獅子王ウィリアム王の身代金集めを議論するために貴族や高位聖職者達が会議を開いた。1195 年と 1230 年の間でホーリールード修道院は増改築された。完成した修道院を持つ教会 (abbey church) の建物は, six-bay aisled 聖歌隊席 (choir), 高い塔を持つ three-bay 翼廊, 西面に 2 つの塔を持つ eight-bay aisled 身廊からなっていた。

そこで 1256, 1285, 1327, 1366, 1384, 1389 そして 1410 年にスコットランド議会が開催された。1326 年にロバート・ドゥ・ブルース (Robert the Bruce, ロバート 1 世) (在位 1306 年-1329 年) がそこで議会を持った。1328 年のスコットランド第 1 次独立戦争の終結をもたらしたエディンバラ・ノーザンプトン協定はロバート・ブルースによってホーリールードの王の部屋でサインされた。15 世紀になるとスコットランド王は俗事の目的でホーリールードに宿泊するようになった。ジェイムズ 2 世とその双子の兄弟アレクサンダー (Alexander Stewart) (1430 年生没) は 1430 年にここで生まれた。ジェイムズ 2 世は 1437 年にホーリールードで戴冠した。ジェイムズ 4 世は, 1498 年から 1501 年にかけてホーリールードの回廊の隣に王宮の礼拝堂を建造した。ホーリールードは, 1544 年と 1547 年の手荒な求婚戦争 (the War of the Rough Wooing) で侵攻してきたイングランド軍にその建物の構造を損ない, 屋根の鉛板を失ない, 鐘は取り去られ, 掠奪された。スコットランドの宗教改革の間, ホーリールードは荒らされた。群衆は祭壇を破壊し, 他のものも盗られた。宗教改革後, 東の祭壇部分は不用になったので, 1569 年, ホーリールードの院長 (Commendator) アダム・ボスウェル (Adam Bothwell) (1527 年生?-1593 年没) (在位 1568 年-1582 年) は聖歌隊席と翼廊を取り除いた。

⁸ その在任期間は 1541 年から 1563 年である。Coldingham Priory (コールディガム修道院) はベネディクト会修道院であり, Coldingham 村にある。現在では, その遺物があるだけである。この修道院は, デイヴィット 1 世 (David I) (在位 1124 年-1153 年) によって 1139 年に創建された。彼の兄エドガー王 (King Edgar) (在位 1097 年-1107 年) がロージアン土地をイングランド王から与えられた (1098 年)。その土地を彼はグーラム教会に寄附をした。1100 年に新しい教会をセントメアリー教会に奉納した。初期の聖コラムバ (521 年生-597 年没) の修道院は 640 年頃聖 Æbbe によって建てられた。

Stewart, 1st Lord of Darnley) (1531年生?-1563年没) が生まれた。彼は、後にメアリー女王の3番目の良人になるジェイムズ・ヘプバーンの妹ジェイン・ヘプバーン(Jean Hepburn) (1599年没) と結婚した。マーガレット・アースキンとの間には幼くして修道院次長を経験していた初代マリ伯ジェイムズ・ステュワート (James Stewart, 1st Earl of Moray) (1531年生-1570年没) が生まれた。このマリ伯は、ジェイムズ6世の摂政(1531-1570年)になるなどステュワート王家では中心的な役割を果たした。また、母親の不明な庶子には、Whithornの修道院次長になったロバート・ステュワート (Robert Stewart) (1581年没) とマーガレット・ステュワート (Margaret Stewart) (生没不明) もいた。

ジェイムズ5世は、王の土地管理を厳しくしてその収入を上げ、さらに裁判手数料、関税ならびに地代からの収入を増加させた。彼は、また、彼の庶子に収入の得られる聖職禄(土地)を与え、そして教会の資産を自己の金庫に取り入れた。その収入を彼はスターリング城、フォークランド宮殿、リンリスゴウ宮殿、ホーリーールド宮殿⁹のために使用し、また、それでジェイムズ4世からの遺品から壁掛けのコレクションを作った。彼はカトリックに疑問を持ってはいなかったのではないであろうか。当時、ヨーロッパ世界は宗教改革の嵐の中であり、隣国イングランドではヘンリー8世がローマ・カトリック教会から破門されていた。その中で彼は、デイヴィッド・ビートン(David Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1494年生-1546年没) と共に、1528年にパトリック・ハミルトン (Patrick Hamilton) (1504年生-1528年没) を聖アンドリュースで異端者として火あぶりの刑に処した。また、イングランド大使がジェイムズに修道院を閉じ、その資産を奪い取ることを進めたが、彼はそれには、

この修道院は1648年にオリヴァー・クロムウェルによってほぼ全壊された。

⁹ スターリング城(Stirling Castle), フォークランド宮殿(Falkland Palace), リンリスゴウ宮殿(Linlithgow Palace), ホーリーールド宮殿(Holyrood Palace)などの王宮の修復に責任があった人物は、フィナートのジェイムズ・ハミルトン (James Hamilton of Finnart) (1495年生?-1540年没)であった。彼は、ジェイムズ5世の宮内執事(Steward of the Royal Household)であり、かつ、建造物主事(Master of Works)であった。彼は、スターリング宮殿およびリンリスゴウ宮殿での修復工事の返礼としてスターリング城にかなりの土地の贈り物を得ている。同様に、彼は、ストラサアヴェン城(Strathaven Castle), クロフォードジョン城 (Crawfordjohn Castle), エディンバラのGorgie城をアヴォンデール (Avondale) 男爵領にした。また、ジェイムズ5世は彼にラナークシャー (Lanarkshire) のDraffanの土地を与えた。1530年に彼はそこにクレグニーザン城(Craignethan Castle)を築いた。また、彼は今日ハミルトンとして知られる町の近くにカズオー城 (Cadzow Castle)を築いた。彼は、1540年7月に反逆罪で逮捕され、その年の8月に彼は有罪判決で処刑された。しかし、彼がどのような反逆罪を犯したのかは知られていない。彼がジェイムズ5世をリンリスゴウ宮殿の外で撃ち殺そうとしたことが罪状であった。彼が、ジェイムズ5世によって爵位、土地、タンタロン城など全てを没収された6代アンガス伯やダグラス一族と接触したことがジェイムズの怒りに触れたのかも知れない。しかし、彼はカトリック教会を護ることにデイヴィッド・ビートンと共に力を注いでいたので、彼が6代アンガス伯と結託するとは考えられない。このジェイムズのジェイムズ・ハミルトンの処刑事件の真相は不明である。

“NO”と返答した。さらに、良き父フランス王に頼ることができると返答した。ジェームズ5世は修道院を閉じることには反対した。その理由として、彼は、教会や修道院がこれまで存在してきたこと、それから良きサービス（ミサ）がもたれていること、さらにその必要性があると答えている。実際には、彼は修道院の収入に税を課し、彼の貨幣収入を得ることをクレメンス教皇の許可を得ていた。ジェームズ5世は国境を超えて進入する異端者を抑圧した。このことで、教皇パウロ3世はジェームズに祈禱者の象徴として剣とキャップを贈った。

1.1.2 ジェームズ5世の外交政策：結婚相手の決定とソルウェイ・モスの戦い

ジェームズ5世の命を奪ったのは、ジェームズ4世と同様に、イングランド王国との外交政策にあった。1534年にスコットランド王国は、イングランド王国とロンドンで両国の国境平和条約を締結した。ヘンリー8世（Henry VIII）（在位1509年-1547年）は、スコットランド王国からの反宗教改革者の進入を恐れていたため、1536年にジェームズ5世に会談すること求めてきた。交渉大使としてジェームズ5世の擁護者であり、マリー・ドゥ・ロレーヌの秘書であったアダム・オターバーン（Adam Otterburn）がヘンリー8世の狙いを探るためにロンドンに派遣された。先に記したように、ジェームズ5世は、1537年にフランソワ1世の娘マドレーヌ・ドゥ・ヴァロア（Marie de Valois, Madeleine de Valois）（1520年生-1537年没）と結婚し、彼女が半年で他界すると、1538年に Marie de Lorraine と再婚した。カトリックにルター派と等しく反対していたヘンリー8世は、イングランド王国を模倣した宗教改革をスコットランド王国に求め、フランスとの「古い同盟」の破棄を執拗に迫って、スコットランド王国に同盟関係を申し入れた。ジェームズ5世と王妃マリー・ドゥ・ロレーヌとの間に生まれた長男ジェームズと次男アーサーが同時に死ぬという不幸に見舞われていた丁度そのとき、ヘンリー8世は、その悲しみにつけ込み、ローマ教会から断絶し、彼の孤立の道連れにスコットランドも引きずり込もうとして、ヨークでの会談を持ち出し、ジェームズ5世からの返事を待たずにして、ヨークに向かった。他方、その申し入れはフランス王国との同盟の破棄を強要するものであるというデイヴィッド・ビートン（David Beaton, Archbishop of Saint Andrews）（在位1539年-1546年）などの重臣の忠告を聞き入れ¹⁰、また、すでに彼の母マーガレット・テューダが死んでいたこともあり、ジェームズ5世は、叔父ヘンリー8世との会談を拒否した（1541年9月）。

それに激怒したヘンリー8世は、スコットランド王国はフランス王国との古い同盟ならびにルーアン協定に縛られ、かつ、カトリック教義を護ると判断し、フロドゥン（Flodden）の

¹⁰ ジェームズ・カーコルディー（James Kirkcaldy）（1566年没）は、プロテスタントへの迫害を止めること、さらにヘンリー8世に会うことを進めた。

戦いの勝者の2代ノーフォーク公トマス・ハワード(Thomas Howard, 2nd Duke of Norfolk) (1443年生-1524年没)の息子であった3代ノーフォーク公トマス・ハワード(Thomas Howard, 3rd Duke of Norfolk)¹¹ (1473年生-1554年没)をスコットランド総司令官にすえ出撃を命じ、国境のロクスバラ(Roxburgh), ケルソー(Kelso)を焼き払らわせた。これに対し、ジェイムズ5世は軍を召集し南進した。その軍がエディンバラの南東のファラ・ムア(Fala Moor)に差し掛かると、その兵隊は南進を拒否した。そのことにジェイムズ5世は、大変に落胆し陰鬱な空気の中でその年を越した。その翌年の1542年には、聖アンドリュース大司教のデイヴィッド・ビートンらの高僧が、軍資金を集め、徴兵の他に傭兵を集め、軍政を整えた。イングランドとスコットランド国境のハドン・リグの戦い(The Battle of Haddon Rig)でスコットランドが大勝した。この戦いでスコットランド軍の指揮官は4代ハントレー伯ジョージ・ゴードン(George Gordon, 4th Earl of Huntly) (1514年生-1562年没)であった。ジェイムズ5世はイングランドを侵攻することを目指したが、彼の配下の貴族はそれを嫌がった。1542年11月に、ジェイムズ5世は、15,000から18,000の軍勢を先頭に南進し、ダムフリーシャーのロツホメイバン(Lochmaben)に到達した。ジェイムズ5世は、西の国境の管理者であった5代マックスウエル卿(Robert Maxwell, 5th Lord Maxwell) (1493年生-1546

¹¹ 彼は、2代トマス・ノーフォーク公の長男で、エドワード4世の5女のアン(Anne) (1475年生-1510年没)と結婚したが、彼女の死亡後、1513年の初めにエリザベス・スタフォード(Elizabeth Stafford) (1479年生-1532年没)と再婚した。このフロドゥンの戦いでスコットランドを大敗させたことによって彼は、1513年の5月に海軍大将に任命され、1514年にノーフォーク公を授けられた。1526年にノーフォーク公の姪であったアン・ブーリン(Anne Boleyn)がヘンリー8世の目に留まると、彼は、政治の中心に入り、トマス・ウルジー(Thomas Wolsey)を排除するようにヘンリー8世に圧力を掛けた。1529年11月にはウルジーが反逆罪で逮捕され、1530年にウルジーは死亡した。彼は、ウルジーの転落後、ヘンリーの主要な顧問官になり、ヘンリーとキャサリン・オブ・アラゴンの結婚を無効にするために努力した。1539年にはヘンリー8世の大臣であったトマス・クロムウェル(Thomas Cromwell) (1485年生?-1540年没)によって宗教改革の挑戦を受けたが、クロムウェルがアン・オブ・クレブス(Anne of Cleves) (1515年生-1557年没)とヘンリー8世の結婚を持ちかけるが、ヘンリー8世は、彼女の容貌に不満があり、その結婚後その結婚を無効にした。これによってクロムウェルは失脚し、1540年7月にクロムウェルは処刑された。その処刑された日にヘンリー8世は、5番目の妻キャサリン・ハワードと結婚した。3代ノーフォーク公はこの結婚によって名声や物質的褒美を獲得した。しかし、キャサリンの結婚前の無分別や彼女の姦通がヘンリー8世に知られ、王の怒りはハワード家に向けられた。キャサリンは1542年2月に処刑された。3代ノーフォーク公は罰せられなかったが、その他のハワード家の人もロンドン塔に閉じこめられた。しかし、改革派のハートフォード伯エドワード・シーモアやキャサリン・パー(Catherine Parr) (1512年生-1542年没)がヘンリー8世に影響を与え、3代ノーフォーク公は政治から遠ざけられた。彼は娘のメアリーとトマス・シーモアの結婚によってシーモア家との連携を考えたが、それは彼の息子サリー伯ヘンリー・ハワード(Henry Howard, 1st Earl of Surrey) (1516/1517年生-1547年没)の王に対する微発的な行為によって制止された。1546年1月にサリー伯ヘンリーは処刑され、3代ノーフォーク公はロンドン塔に閉じこめられ、処刑される予定であったが、ヘンリー8世の死によって、処刑を免れた。彼は、1553年にメアリー1世によって免除されるまで、ロンドン塔に閉じこめられていた。

年没)に軍を召集する役割をあてがい、反英・反プロテスタントの武将オリヴァー・シンクレア (Oliver Sinclair of Pitcairns) (1576 年没?) を総指揮官に任命した。ジェイムズ 5 世の寵愛した宮廷人オリヴァー・シンクレアは下級貴族であった。彼の仕事は、宮廷での cupbearer であり、ジェイムズ 5 世の財布管理人であり雑用係であった。その彼が 1542 年のイングランドとの戦いであったソルウェイの戦いで指揮を執るとは理解できない。実際に、シンクレアが指揮官であったかどうかには異説がある。シンクレアは、自身で、ジェイムズ 5 世が選んだ指揮官であると報告した。もしシンクレアが指揮官であったならば、他の貴族は、シンクレアの指揮命令に従わなかったであろう。ジェイムズ 5 世は、その部隊に国境越えを命じたが、シンクレアの指揮に従う武将貴族は多くはなかった。シンクレアの部隊は、イングランド軍の罠にかかり、エスク川 (River Esk) とリン川 (River Lyne) の間でイングランド軍と戦ったが、スコットランド軍はイングランド軍の騎馬隊に追い回され、エスク川の南で、沼沢地のソルウェイ・モス (Solway Moss) に引きずり込まれ、イングランド騎兵隊に 10 フィートの大砲を引き渡し、捕らえられた。スコットランド兵が川と沼地で溺れた¹²。各隊の指揮官は戦わずして投降する有様でシンクレア自身もイングランド軍の捕虜になった。スコットランド軍の大敗であった。スコットランド兵はニューキャスルに連れて行かれた。捕虜には、指揮官の一人であったロバート・マックスウェル (Robert Maxwell, 5th Lord Maxwell) (1493 年生-1546 年没)、ジェイムズ 5 世の寵愛者オリヴァー・シンクレア、その兄弟のジェイムズ・シンクレア (James Sinclair) などがいた。ジェイムズ 5 世の死の報告を受けたヘンリー 8 世は政策を手荒な求婚に変更したので、捕虜は身代金を払って釈放された。

ジェイムズ 5 世は、ロソホメイバンからフォークランド宮殿に帰り、彼の軍旗が盗られたこととシンクレアが捉えられたことを嘆き悲しんだ。彼は、あまりの悲痛のためにそのまま寝つき、熱を出し精神を病み、その一週間後に王妃マリー・ドゥ・ロレーヌが女の子を産んだとの知らせを受け取ったが、それから 6 日後の 12 月 15 日にその 30 年の生涯を閉じた。彼は、ホーリルード修道院に埋葬された。その戦いでスコットランドの敗因は、第 1 に、スコットランド軍の指揮官の未熟さ、第 2 に、スコットランド軍の指揮命令系統が整備されていなかったことなどである。

ジェイムズ 5 世の治績の第 1 は、民事の中央裁判所 (College of Justice) をエディンバラに設けたことである。これは、現在のスコットランドの最高民事裁判所である court of session に繋がっている。その第 2 は、王国の財政を巧く遣り繰りして、教会の収入を王国の特別プロジェクトに使い、ホーリルードハウス、リンリスゴウ宮殿、フォークランド宮殿の改築に

¹² この戦いで殺されたスコットランド兵は 20 人、捕らえられた兵は 1,200 人、溺れた兵が数百人であった。このことから、スコットランド軍の敗因は指揮命令系統の不備であった、と思われる。

あて、当時のルネッサンス建築の中でも優れたものであった。スターリング・ヘッドと呼ばれる木彫の天井飾りは、現存するスコットランド・ルネッサンス調の最高の木彫である。これは、ジェームズ5世の文化面での治績である。

1.2 ヘンリー8世による手荒な求婚とピンキー・クロッホの戦い

ジェームズ5世の死後、直ちに、生後6日のメアリー (Mary Queen) (在位 1542年-1567年)がスコットランド国王として即位¹³した。スコットランド王国は、アサル家の最後のマーガレット女王と同じように、またもや嬰兒女王による統治となった。メアリー女王が生長するまで、王の執務を支える摂政職が必要であった。最初に、ジェームズ2世の曾孫で、プロテスタントで親英派であった2代アラン伯ジェームズ・ハミルトン (James Hamilton, Duc de Châtellerauld, 2nd Earl of Arran) (1516年生?-1575年没)が摂政に就いた¹⁴。メアリー女王は、スコットランド・ステュワート朝において、最初で最後の女王であった。2代アラン伯はメアリー女王に継ぐ第2位の王位継承者であった。彼は、メアリー女王の摂政になった。2代アラン伯は、はじめプロテスタントで親英派であったが、その後にカトリックで親仏派になり、メアリー女王とフランスのフランソワ王子との結婚に同意した。1548年にその働きによって、2代アラン伯はフランスの公爵位 (Duc de Châtellerauld) を授けられた。1554年にアラン伯は摂政役を王母マリー・ドゥ・ロレーヌに譲った。彼は、メアリー女王が幼くして死んだ場合に王位を継承するという条件で摂政を譲った。しかし、メアリー女王がフランスの王子と結婚したことによってスコットランドの王位継承は、フランスに移っていた。1559年に2代アラン伯ハミルトンは、再び、プロテスタントに転向し、マリー・ドゥ・ロレーヌの摂政に反対した。そのために彼はフランスの公爵位を失った。1560年にフランス王フランソワ2世が崩御したとき、2代アラン伯ハミルトンは、彼の息子ジェームズを未亡人メアリー女王と結婚させようとした。

ジェームズ4世の時にエドワード4世 (Edward IV) (在位 1461年-1470年, 1471年-1483年)が採った政策と同じように、ヘンリー8世は、一人息子のエドワード王子¹⁵ (後のエドワー

¹³ メアリーの戴冠式は、1543年9月9日に執り行われた。即位と戴冠が異なるのは、王母マリー・ドゥ・ロレーヌとアラン伯の間の確執があったことによる。王母マリー・ドゥ・ロレーヌと2代アラン伯の確執は、王女メアリーに対するイングランドとフランスからの結婚申し込みにも現れていた。

¹⁴ 2代アラン伯は、1542年から1554年まで摂政職にあった。その後、1554年から1560年までは王母マリー・ドゥ・ロレーヌが摂政職にあった。その後、フランスから戻ったメアリー女王が親政を執った。

¹⁵ エドワード6世の母親は、ジェイン・シーモア (Jean Seymour) (1508年生-1537年没)であった。彼女は、ヘンリー8世の3番目の王妃であった。ヘンリー8世は、王妃アン・ブーリンが後継ぎ男子を流産した後、アンに対してもキャサリン・オブ・アラゴンと同様に結婚無効を宣言し、さらにアンが宮廷関係者と密通したとして逮捕し、ロンドン塔に投獄した。彼女は、反逆罪で断頭の刑に処せられた。アン王妃の

ド6世)とメアリー女王の結婚を通じて、イングランドとスコットランドの一体化政策(連合; Alliance)を推進するため、1543年6月にグリニッジ条約でエドワード王とメアリーの結婚の約束をスコットランドに押しつけた。これは、イングランド王国とスコットランド王国の一体化政策であり、かつ、ヘンリー8世(Henry VIII)(在位1509年-1547年)による執拗なフランス王国とスコットランド王国との分断政策でもあった。しかし、この約束を摂政の2代アラン伯は、国内のフランスとの連合を推進する派閥¹⁶などとの闘争に阻まれ、なかなかその結婚を実行することができなかった。枢密卿デイヴィッド・ビートンが実権を握ると、スコットランド王国は、カソリックを選び、フランス王国との同盟を優先させる政策を強め、反イングランドの姿勢を採った。王母マリー・ドゥ・ロレーヌ¹⁷(Marrie de Lorraine)(1515年生-1560年没)は親仏政策を推進した。王母は、イングランドによるスコットランド侵攻の危険を感じて、1543年9月にメアリー女王をリンリスゴ宮殿(Linlithgow Palace)からスターリング城に移し、そこでメアリーは戴冠した。このようにメアリー女王の戴冠が遅れたのは、イングランド王国とフランス王国の外交政策にスコットランド王国が振り回されたためであった。

また、スコットランド議会は1543年12月にグリニッジ協定を放棄した。1544年5月に初代ハートフォード伯エドワード・シーモア(Edward Seymour, 1st Earl of Hertford)¹⁸(1506

処刑の翌日の1536年3月20日に、ヘンリー8世は、キャサリン・オブ・アラゴンの侍女であったジェイン・シーモアと結婚したが、2人は結婚式を挙げなかった。1537年10月にジェイン・シーモアは待望の世継ぎの男子(エドワードと命名)をハンプトン・コート宮殿で出産した。しかし、産褥熱のためジェイン・シーモアは産後10日で他界した。ヘンリー8世は、1540年に妃アン・オブ・クレーヴィス(Anne of Cleves)(1515年生-1557年没)と4度目の結婚をし、1540年7月に5番目の妃キャサリン・ハワード(Catherine Howard)(1521年生-1542年没)と結婚した。ヘンリー8世は、1542年2月、不貞をはたらいたキャサリン・ハワード王妃をロンドン塔で処刑し、1543年7月に第6の妃キャサリン・パー(Catherine Parr)(1512年生-1548年没)と結婚した。

¹⁶ 国内最大の派閥はアンガス伯ダグラスであり、摂政アラン伯は4代レノックス伯マッシュュー・ステュワート(Matthew Stewart)(1516年生-1571年没)と対立していた。

¹⁷ 彼女は、フランソワ1世の重臣ギーズ公クロード・ドゥ・ロレーヌ(Claude de Lorraine, Duc de Guise)(1496年生-1550年没)とアントワネット・ドゥ・ブルボン(Antoinette de Bourbon)(1493年生-1583年没)の娘であった。マリー・ロレーヌは、ジェイムズ5世の二番目の王妃であったが、フランスから再び王妃を迎えたことにはヘンリー8世は不満やせなかった。

¹⁸ 彼は、ヘンリー8世の3番目の妻ジェイン・シーモアの兄であった。ジェインがヘンリー8世と結婚した1536年にボーキャンプ子爵、1537年10月にはハートフォード伯爵は授けられた。彼は、スコットランド国境の監視官になった。彼は軍人としては優れていた。その能力は、1544年のエディンバラ焼き払い(Burning of Edinburgh)と知られるスコットランド侵攻で示された。彼は、ピンキーの戦いで勝利後、スコットランドに要塞網を築き、ダンディーまで拡げることがを計画していた。しかし、スコットランドがフランスと共闘してエディンバラを防衛し、スコットランド女王メアリーがフランス王子と結婚することとなり、イングランド軍をスコットランドに駐留させ、要塞網を維持する費用がかさみ、さらに、イングランド国内でも共有地への羊の進入に対する不満からノフォークで起こったKettの反乱や、礼拝における祈祷書の

生-1552年没) (1547年に初代サマーセット公に叙爵)が、スコットランド王国とメアリー女王を支配するためにファイフ港に接近した。初代ハートフォード伯 (後の初代サマーセット公) は、まず1544年3月のヘンリー8世の声明 (大司教ビートンの不吉な誘惑に戦争責任があるという声明) を実行し、エディンバラを燃やす指令を負っていた。彼自身は、外国貿易や物資の供給港であったリースにエディンバラ要塞を築くことを計画したが、枢密院会議に拒否された。またヘンリー8世は彼に聖アンドリュースを焼くように命じたが、エディンバラから離れすぎている。スコットランド王国の対応が遅いことに怒ったヘンリー8世は、その使者によってエディンバラでスコットランドに宣戦布告を行い、ジェインの兄エドワード・シーモアに出動を命じ、武力を背景に結婚を迫った。これは、手荒な結婚申し込み、あるいは、ハートフォードの侵入と知られている。この時には、王女メアリーは拉致されることもなく、その難を避けることができた。これが1550年まで続く手荒な求婚戦争 (The War of the Rough Wooing) であった。この交戦は1544年5月にエディンバラへの攻撃によって始められ、初代ハートフォード伯達によって指揮されたイングランド軍は、フォース北側の聖ミネット (St Mynettes) を焼き、上陸用のつり船を奪い、Grantonに上陸し、重要な港であったリース (Leith) を支配した。翌日、イングランド部隊はエディンバラのCanongateに入り、街に火を付けた¹⁹。リースに停泊していたイングランド船は略奪品を奪い取り、Unicorn and Salamander²⁰に積み、そこを出港した。陸路で戻ったイングランド軍はその途中でスコットランドの町や村を焼き払った。

このイングランドの侵攻に対し、1545年2月、スコットランドはアングラム・ムーアの戦い (The Battle of Ancrum Moor) で勝利した。この戦場はジェットバラの北西4マイルであった。この戦いは1545年2月27日に、スコットランドの指揮官が2代アラン伯ジェイムズ・ハミルトンと6代アングラス伯アーチボルト・ダグラス、他方、イングランドの指揮官

強制に対する不満からディボーンとコーンウォールで起こった反乱のために、1549年にシーモアはスコットランドから手を引いた。

¹⁹ この火事でエディンバラ城はローヤル・マイルの canon-fire commanding によって護られた。

²⁰ Salamander (サラマンダー) は、1537年5月にフランス王フランソワ1世からジェイムズ5世とマリ・ドゥ・ヴォアラ (Madeleine of Valois) との結婚贈答品の2艘の軍艦の1艘であった。1548年5月に修理された Salamander (サラマンダー) は、新しい女王マリ・ドゥ・ロレーヌ (Marie de Lorraine, あるいは Mary of Lorraine) (1515年生-1560年没) を連れてくるためにフランスに戻った。その後、サラマンダーはジェイムズ5世の旗艦になった。1540年6月に、旋回式鉄砲を装備し、鉛の底荷を載せて、ジェイムズ5世はリースを出港し、オークニのカークウォールに向かった。ルイス島に行き、ダンバートン、アイヤー、アーヴィンなどから食糧を積み、7月にエディンバラに戻った。1544年5月、サラマンダーは、イングランド軍に分捕られ、8万のスコットランドの砲弾を底荷として初代ハートフォード伯の軍の輸送船として使用された。また、1547年8月には、イングランド船に名 (galleas という名) を連ね、ピンキー・クロッホの戦いでは海軍の爆撃に貢献した。1547年にサラマンダーは破壊された。

がラルフ・エウル (Ralph Eure) (1544 年没?) の下で起こった。この戦いでスコットランド軍は勝利した。スコットランドの勝利の要因は、1544 年 4 月に 6 代アンガス伯が Blackness 城で牢獄に入れられていたが、彼にアラン伯と連携することフランス王子に手を貸すことを約束させ、敵対する 6 代アンガス伯やジョージ・ダグラス (George Douglas of Pittenreich) (1552 年没) を釈放し (1544 年 6 月)、スコットランドの防衛に協力させたことであった。1546 年 6 月 6 日のキャンプ協定 (Treaty of Camp)²¹ によってイングランドとスコットランドの間に 18 ヶ月の休戦が約束された。

しかし、1546 年 5 月にファイフのプロテスタントの laird 達が聖アンドリュース城で大司教のビートンを暗殺した。大司教の体を切断し、それを城の窓から吊した。彼らは聖アンドリュース城に守備隊を駐屯させたが、諮問に応じなかったために、謀反人とされ、1547 年 7 月にフランス海軍が Castilians から聖アンドリュース城を奪還したとき、捕らえられ、フランスに護送された。この大司教ビートンの暗殺は、プロテスタントの勝利への第一歩であったと思われる。大司教ビートンのヘンリー 8 世に対する姿勢は愛国的であった。彼はプロテスタントによってフランス人と揶揄されたが、彼は一貫してスコットランド王国の利益のために行動した。彼の暗殺は、16 世紀後半のスコットランドの宗教的闘争の前哨戦であった。聖アンドリュース大司教ビートンの暗殺者達のリーダーは軍人のノーマン・レズリー (Normann Leslie) (1554 年没) であった。彼は、1542 年にソルウェイ・モスの戦いに参戦し、イングランドの捕虜になった。彼も、また、他の捕虜と同様に、ヘンリー 8 世の手荒な求婚企画を実行するという契約書に署名したことによって釈放された。1544 年 4 月に、ヘンリー 8 世が暗殺後の身の安全を保証するという条件のもとで、彼らが大司教ビートンの暗殺を実行することをヘンリー 8 世に伝えた。しかし、ヘンリー 8 世から満足な返答がなかったため、その暗殺を控えた。彼は、1545 年 2 月のアンクルム・ムーアの戦いではイングランドに対して戦った。1545 年 5 月から 10 月までの間、再び、大司教ビートンの暗殺がイングランドとの間で交渉された。1546 年 5 月 19 日に聖アンドリュース城に住んでいたビートンの暗殺がノーマン・レズリーの命令で実行された。暗殺後、彼らは、その城に立て籠もったが、1547 年 7 月 30 日に、暗殺の諮問に呼び出されたが、それに応じなかったため、反乱者とされ、その城はフランス軍に引き渡され、彼とその仲間は捕らえられ、フランスに護送された。彼は、ウィリアム・カーコルディー (William Kirkcaldy) (1520 年生-1573 年没) と共にフランスから逃げだし、イングランドに渡り、エドワード 6 世から献金を受け取って生活した。しかし、1553 年にメアリー 1 世が王位を継承すると、フランスに渡った。聖アンドリュース城に籠もったレルド (laird)

²¹ あるいは Ardres 協定において 18 ヶ月の休戦が成立した。この協定でイタリア戦争 (1542 年-1546 年) が終結した。

達は Castilians として知られている。ノーマン・レズリー、ウィリアム・カーコルディー、ヘンリー・バルナヴェス (Henry Balnaves) (1512 年生? -1579 年没) がその城に立て籠もった。

大司教ビートンの後任はジョン・ハミルトン (John Hamilton, Archbishop of Saint Andrews)²² (在位 1547 年-1571 年) (1511 年生? -1571 年没) であった。

1.2.1 ピンキー・クロッホの戦い：スコットランドの大敗北

ヘンリー 8 世の死後もイングランドの侵攻は止まなかった。ヘンリー 8 世が他界し、エドワード 6 世 (Edward VI) (在位 1547 年-1553 年) が即位する²³ と、1547 年 9 月に国王の伯父かつ初代サマーセット公エドワード・シーモア (彼は護国卿; Protector になった) がヘンリー 8 世の政策を引き継ぎ、さらにイングランドの宗教改革をスコットランド王国に押しつける意図を持って²⁴、再びスコットランド王国に攻撃を仕掛けてきた。摂政の 2 代アラン伯は、先の協定でスコットランド国境の Langholm に置かれていたイングランドの要塞を取り除けなかったため、1547 年 9 月に武力でそれを取り去ろうと攻撃を仕掛けた。その 9 月にイングランド軍が侵攻してきた。これはマッスルバラ近くの Pinkie Cleugh で起こったピンキー・クロッホの戦い (The Battle of Pinkie Cleugh) と知られている。ピンキー・クロッホの戦いで 2 代アラン伯は敗北した。この戦いでスコットランド南部の大半はイングランド軍に制圧され、ハディングトン²⁵ ならびにダンディー近くの Broughty 城も制圧された。1548 年 6 月 9 日にイングランド軍によってマッスルバラが焼かれ、6 月 12 日にはダンバーが焼かれた。この城はダンディーの Broughty Ferry にあり、2 代グレー卿アンドリュウ (Andrew Gray, 2nd Lord of Gray) (1446 年生? -1514 年没) によって建てられた。このとき、この城は、イングランド軍の駐屯地とされた。その仕事は、アンドリュウ・ダッドリー (Andrew Dudley)

²² 彼は、初代アラン伯の庶子である。彼はベズリー修道院長を歴任している。

²³ エドワード 6 世が王位を継承するとき、ヘンリー 8 世の遺言によって、エドワードが 18 歳になるまでの摂政会議の 16 人の執政官が任命された。その中には、初代エドワード・シーア、初代ウォリック伯 (初代ノーザンバーランド公) ジョン・ダッドレー、トマス・ウリオセスリー (Thomas Wriothesley, 1st Earl of Southampton) (1505 年生-1550 年没)、ウィリアム・パゲット (William Paget, 1st Baron Paget) (1506 年生-1563 年没) 等がいた。

²⁴ 2 代アラン伯は初代サマーセット公がスコットランドに攻撃をすることをアダム・オターバン (Adam Otterburn) (1548 年没) からの手紙によって知らされた。

²⁵ サマーセット公エドワード・シーモアは、1548 年 4 月 18 日にウィリアム・グレー (William Grey, 13th Baron Grey de Wilton) (1508 あるいは 1509 年生-1562 年没) をベリクの統治者に任命し、ロンドンに引き返した。陸軍元帥かつ司令長官であった第 13 代男爵ウィリアム・グレーは、憲兵将校のジェイムズ・ウィルフォード (James Wilford) (1516 年生-1550 年没) を司令官にしてハディングトンを攻略し、要塞とした。さらに、その 7 月には彼の軍は、ダルキース宮殿 (Dalkeith Palace) を焼き、ジェイムズ・ダグラス (将来の摂政モートン) を捕虜にして、エディンバラから 6 マイルの地域を荒廃させ、ベリクに戻った。

(1507年生-1559年没)によって指揮された。1548年1月にスコットランド軍の右サイドを4,000のハイランド軍で指揮していた4代アーガイル伯アーチボルド・キャンベル(Archibald Campbell, 4th Earl of Argyll) (1507年生? -1558年没)はBroughty城を取り戻そうとするが、イングランドの交渉人は彼を引き留め、彼は金で追い払われた。1550年2月にフランス軍(その指揮官はPaul de Thermes)とスコットランド軍がBroughty城を奪還した。

この戦争にはいくつかの特徴がある。第1に、この戦争はイングランドとスコットランドの間で交わされた最後の戦争、第2に、イングランド軍が陸上戦に海軍の大砲を利用した戦争、第3に、イングランド軍がルネサンス軍隊であったが、スコットランド軍は旧式中世の軍隊であった。この第3の特徴が、ピンキー・クロッホの戦いにおけるイングランド軍とスコットランド軍の軍備の違いである。初代サマーセット公の総軍勢は20,000人弱であったが、その大半は長弓と長柄の矛の兵士であった。しかし、彼の軍には、数百の火縄銃隊、よく整備された大砲隊および6,000の騎兵隊が含まれていた。スコットランドの総軍勢は、22,000から23,000人(あるいは36,000人という説もある)で構成されていた。そのスコットランド軍の大半は槍兵であった。そのほかに、大砲軍および騎兵隊からも構成された。しかし、アラン伯の大砲は固定方式で、サマーセット公の大砲ほどには上手く操作できなかった。また、2,000人の軽装備の騎兵隊がいた。軍備から両軍を比較する限り、イングランドのほうが近代的であった。軍勢でスコットランド軍が優勢であったとしても、騎兵隊や大砲や火縄銃では圧倒的にイングランド軍が優勢であった。

王母ロレーヌは、メアリー女王をスターリング城の秘密の部屋に匿った。メアリー女王の身の安全に恐怖を感じた王母は、王女メアリーをインチマホーム修道院に送り、フランスに助けを求めた。1548年に、イングランド軍が引き返すことを知り、王母ロレーヌはメアリー女王をハンプルトン宮殿(Hambleton Palace)に移動させた。フランスからの援軍が到着し、そして1548年7月に、フランスとの結婚条約がハディントンの近く的女子修道院で調印された。

スコットランド王国はイングランド軍に包囲されていたが、フランス王国からの軍事的かつ資金的支援によって戦いを続けることができた。1548年6月16日に1万のフランス軍²⁶がリースに到着し、その7月に大砲でハディングトンを包囲し、1549年9月にイングランド軍を撤退させた。1549年9月に2代アラン伯の5,000の軍がハディングトンを包囲し、それを奪い返した。その勝因は、スコットランド軍の夜襲、イングランド兵の病気などであった。軍勢ではイングランド軍が優勢ではあったし、また戦局もイングランド軍に傾いていたが、

²⁶ これに対しイングランド軍は3,200の兵隊で、イタリアやスペインやドイツの傭兵が2,000人であった。軍勢でフランス軍が優勢であった。

食糧が切れたことによって病死者が多く発生したので、イングランド軍がその町を捨て、ベリクに敗走した。ハディングトンの包囲戦は、1548年7月にフランス軍とスコットランド軍によって始められた。この包囲戦での大砲の調達などは、マーガレット・テューダ（6代アンガス伯と離婚した後に）と結婚し、マーガレット・テューダの死後、彼の妾ジャネット・ステュワート（Janet Stewart）（1516年没？）（2代アサル伯の娘）と結婚した初代メスヴェン伯ヘンリー・ステュワート（Henry Stewart, 1st Lord Methven）（1495年生？-1552年没）によってなされた。1549年にイングランド軍はハディングトンを放棄した。これがハディングトンの包囲戦²⁷であった。1550年3月のブーローニュの協定（The Treaty of Boulogne）で手荒な求婚戦争は終結した。3月29日に両王国の間で講和が宣誓され、囚人を返し、国境要塞を取り壊すことが条件であった。フランス王国とイングランド王国の捕虜が交換された。1551年のノーラム協定（The Treaty of Norham）²⁸で戦争は終結し、スコットランド王国からイングランド軍は撤退した。この協定では、イングランド王国がスコットランド王国に保有しているもの全てを放棄すること、国境を元に戻し紛争地を以前の使用に戻すこと、トイード（Tweed）川での漁業権をスコットランドに返すこと、全ての捕獲物、担保、人質を戻すことが約束された。1551年10月にメアリー・ロレーヌはエドワード6世に会見するためにポーツマスからロンドンに向かった。

1.2.2 イングランドとスコットランド合同のためのプロパガンダ

ヘンリー8世のイングランド王国とスコットランド王国をメアリー女王とエドワード王子の結婚を通して合同させようとする提案に全てのスコットランド貴族が反対したわけではなかった。プロテスタントのスコットランド貴族は、イングランド王国との合同に加担するかそれともスコットランドの独立かに揺れていた。それぞれのプロテスタントの貴族は、ある時には、その合同に賛成し、他の時には、その合同に反対し、スコットランド王国のために戦っ

²⁷ この包囲線のイングランド軍の隊長は、5代シュールズバリー伯フランシス・タルボト（Francis Talbot, 5th Earl of Shrewsbury）（1500年生-1560年没）であった。1549年から1560年まで彼は北部州（Council of the North）の長官であった。彼はカトリック教徒であったが、ヘンリー8世から修道院解散にともなって土地を与えられた。エドワード6世の治世下では、改革派に従ったが、枢密院公選としてはメアリー1世の擁立に尽力した。彼の息子は、メアリー女王の監視役であった6代シュールズバリー伯ジョージ・タルボト（Thomas Talbot, 6th Earl of Shrewsbury）（1528年生-1590年没）である。

²⁸ 講和協定の交渉は1551年6月10日にノーラム城とその教会で行われた。スコットランド側からは、ドライバラ修道院（Dryburgh Abby）の大修道院長（Commendator）であったトマス・アースキン（Thomas Erskine）（1551年没）、マックスウェル卿（Roberet Maxwell 1st Lord Maxwell）（1493年生-1546年没）、ロバート・カーネギー（Robert Carnegy of Kinnaird）（1565年没）、オークニの司教であったロバート・レッド（Robert Reid）（1558年没）が出席した。イングランドの代表はロバート・ボオウ（Robert Bowes）（1495年生？-1554年没）であった。

た。イングランド王国は、すでにエドワード 1 世 (Edward I) (在位 1272 年-1307 年) ならびにエドワード 3 世 (Edward III) (在位 1327 年-1377 年) の時に、スコットランドに対し王位継承権を主張していた。ヘンリー 8 世の両王国の合同政策は、エドワード 1 世や 3 世とは違い、イングランドによるスコットランドの直接統治を求めたのではなく、スコットランドがイングランドと同じアングリアン・キリスト教を受け入れ、両国が連合する形式であった。ヘンリー 8 世は、その合同によって両国の間に永久平和を達成することを目指していたのかも知れない。しかし、彼は、2 人の男児が相次いで死亡したジェイムズ 5 世に合同を申し入れた。ヘンリー 8 世は、ジェイムズ 5 世の叔父で、彼に子女が生まれなかった場合には、王位の継承権をもっていたので、ウェールズを併合したように、スコットランド王国もイングランド王国の一部にできると考えていたのかも知れない。メアリー女王とエドワード王子の結婚の推進のために、イングランドでは、両王国の合同の可能性や両国にとってプロテスタントのメリットを宣伝した。

ヘンリー 8 世は、ソルウェイ・モスの戦いで捕虜に彼が推進していた両国の合同を支持することを約束させ、その身柄を解放した。これによってイングランド王国のその企画を後押しをさせた。スコットランドの貴族の中には、この政策に翻弄される者や賛成する者がいた。初代マックスウェル卿ロバート・マックスウェル (Robert Maxwell, 1st Lord Maxwell) (1493 年生-1546 年没) は、デイヴィッド・ビートンに腹を立て、聖書をスコットランド語や英語で自由に読むことに賛成するプロテスタントであった。彼は、また、ヒュー・サーマーヴィル (Hugh Somerville, 5th Lord Somerville) (1484 年生?-1549 年没) と共にヘンリー 8 世の手荒い求婚の陰謀を推進する 6 代アンガス伯の代理であった。1543 年 10 月に初代マックスウェルとヒュー・サーマーヴィルは、陰謀家 4 代グレンケアン卿ウィリアム・カニングム (William Cunningham, 4th Earl of Glencairn)²⁹ (1490 年生?-1548 年没) やプロテスタントの 3 代カシリス伯ギルバート・ケネディー (Gilbert Kennedy, 3rd Earl of Cassilis)³⁰ (1515 年生-1558 年没) に手紙を書いている時に、ベイズリーの修道院長ジョン・ハミルトン (John Hamilton) (在位 1525 年-1553 年) に捕らえられ、マックスウェルはエディンバラ城に送られた。彼は、釈放後、4 代レノックス伯 (Matthew Stewart, 4th Earl of Lennox) (1516 年生-1571 年) に加わってグラスゴー・ムーアーで 2 代アラン伯と戦うが、大敗し、

²⁹ 彼もソルウェイ・モスの戦いでイングランドの捕虜 (ノーフォーク公の人質) になった。1,000 ポンドの身代金とヘンリー 8 世の手荒い求婚のプロジェクトを支持することを条件に釈放された。しかし、1544 年 4 月の 4 代レノックス伯 (Matthew Stewart, 4th Earl of Lennox) (1516 年生-1571 年没) と連合して 2 代アラン伯にグラスゴー・ムーアーで戦うが、大敗した。彼は、ヘンリー 8 世のプロジェクトを放棄して、2 代アラン伯に釈放された。4 代レノックス伯はイングランドに逃亡した。

³⁰ 彼もソルウェイ・モスの戦いでイングランドの捕虜であった。彼は、カンタベリー大司教トマス・克蘭マーの人質になり、その影響でプロテスタントになった。

牢獄に入れられた。彼は、イングランド軍がリースに接近していた1544年5月に釈放され、スコットランド軍として戦ったが、ヘンリー8世からその忠誠心を疑われ、ロンドン塔に送られた。1545年10月にCaerlaverock城を引き渡すことを条件に釈放された。スコットランドに戻ると、デイヴィッド・ビートンに捕らえられ、ダンフリース (Dumfries) に送られたが、生命の恐怖からヘンリー8世と取引したとの裁定で彼は許された。ヒュー・サーマーヴィル (Hugh Somerville, 5th Lord Somerville) もまたソルウェイ・モスの戦いでイングランドの捕虜にされ、ヘンリー8世から彼の身代金 (の一部) 200ポンド受け取った。彼は、1543年に6代アンガス伯に加担して2代アラン伯との派閥争いに加わるが、マックスウェル卿と共に捕らえられ、エディンバラ城に入れられた。

4代グレー卿パトリック・グレー (Patrick Gray, 4th Lord of Gray) (1518年生?-1584年没) は、プロテスタントで土地所有者であり、ソルウェイ・モスの戦いでイングランドの捕虜にされ、イングランドではヨーク大司教の人質として捕らえられたが、1544年にスコットランドに戻った。イングランド軍が1547年3月の聖アンドリュース城を包囲しているとき、彼は、イングランド王エドワード6世の人質であった。彼は、パースの権利と彼の兄弟の返還のために、ヘンリーの手荒な求婚の企画を推進し、イングランド軍にBroughty城とパースのスペイ川をイングランド軍に引き渡すことを約束した。また、その城をイングランドの駐屯地にし、2代アラン伯に抵抗することにダンディーの町も賛成した。ノーザンバーランド公の兄弟のアンドリュー・ダッドリー卿 (Sir Andrew Dudley) (1507年生-1559年没) の強迫下でその城主 (John Scimgeour), 市参事会員, 州も駐屯契約に調印した。3代ルースヴェン卿パトリック・ルースヴェン (Patrick Ruthven, 3rd Lord Ruthven)³¹ (1520年生?-1566年) は、手荒な求婚戦争の間、パースをイングランドに引き渡すことで利益を得ようとし、その城を支配していたダッドリー卿にパースを提供した。

ジェイムズ5世の死後のイングランド王国との戦争でスコットランド王国は大敗し、フランス王国の参戦がなければスコットランド王国はイングランドに併合されていたかも知れない。ジェイムズ4世の死後、初代アラン伯ならびに2代アラン伯と6代アンガス伯の対立抗争に代表されるように、スコットランド王国内は派閥闘争に明け暮れていた。その傾向はジェイムズ5世の死後も続いた。スコットランド王国は、ヘンリー8世の手荒い求婚に揺さぶられ、その政策を引き継いだエドワード6世の攻勢にも苦戦を強いられた。その模様は、ソルウェイ・モスの戦いでイングランドの捕虜になった貴族の行動に表出された。また、スコッ

³¹ 彼は、最初、6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスの庶子であったジャネット・ステュワート (Janet Stewart) (1552年没?) と結婚し、次に、2代アサール伯ジョン・ステュワート (John Stewart, 2nd Earl of Atholl) (1475年ごろ生-1519年没) と結婚した。

トランド王国内には爵位貴族とそれが与えられない土地貴族がいた。後者の土地貴族は、2代アラン伯に対抗して、ヘンリー8世の手荒な求婚企画に賛同した。この爵位なしの土地貴族が次世代スコットランド王国を築く核になった。スコットランド人は何故イングランドに興味したのであろうか。初代メスヴェン伯ヘンリー・ステュワート(Henry Stewart, 1st Lord Methven) (1495年生?-1552年没)が1548年6月3日にマリー・ギーズに興味深い手紙を書いている。それによると、その主な要因として、宗教、恐怖、予言での信念の高い評価、そしてイングランドの裁判や規則がより優れているという無知な自惚れを挙げている。彼は、マリー・ギーズに懲罰ではなく恩赦と許しによってスコットランドの一体性が遂げられることを述べている。しかし、その流れを阻止するフランス軍に護られたメアリー女王の王母マリー・ギーズが1554年から1560年までスコットランド王国の摂政としてその政府を牽引した。

むすびにかえて

本稿では、16世紀中葉のスコットランドの宗教改革前夜、自国のアイデンティティを模索し、その自立に政治生命を賭けた国王ジェームズ5世は、イングランド王国の支配あるいは征服を回避しながら、徐々にイングランド王国の一体化政策に飲み込まれていく状況を歴史的出来事から調べた。ヘンリー8世やエドワード4世による手荒な求婚戦争、例えばピンキー・クロッホの戦いによって、イングランドに譲歩を迫られ、スコットランドは、エディンバラ条約によってフランスとの古い同盟を破棄し、否応なしに、イングランドとの一体化に前進したことを明らかにした。

参考文献

- マックス・ウェーバー 著(大塚 久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
スマウト, T. C. (木村 正俊監訳)『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
A. L.モートン(鈴木亮・荒川 邦彦・浜林 政夫訳)『イングランド人民の歴史』未来社 1976年
森 護 著『スコットランド王国史話』大修館書店 1996年12月
森 護 著『英国王室史話』大修館書店 1988年7月
David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年
(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)